

変化しつつある言葉について

土橋 由太郎 23B12229
東京工業大学工学院

1. はじめに

日本語の使い方はここ数年で変化しているのか。
近年急激に日本語が変わっているということをよく聞く。そこで実際に日本語の使い方に変化が起きているのか調べるために、一部の日本語の使い方が数年前から変わっているかについて調査する。

2. 方法

日本語が乱れていると言われる要因の一つに、「『ら』抜き言葉」、「『さ』入れ言葉」があり、先行研究で「『ら』抜き言葉」、「『さ』入れ言葉」を使っている割合を調査しているものがあるので、それと今回自分で集めたデータとを比べ、日本語の使い方に変化が起きているかを調べる。データはgoogle formを使って40人にアンケート調査を行う。

3. 結果

下に「ら」抜き言葉、「さ」入れ言葉を使った割合の今回の調査と令和二年度の調査の図がある。この2つのデータで割合の差に大きく変化があるものに注目してほしい。

図1: 今回の調査による二つの言い方の割合

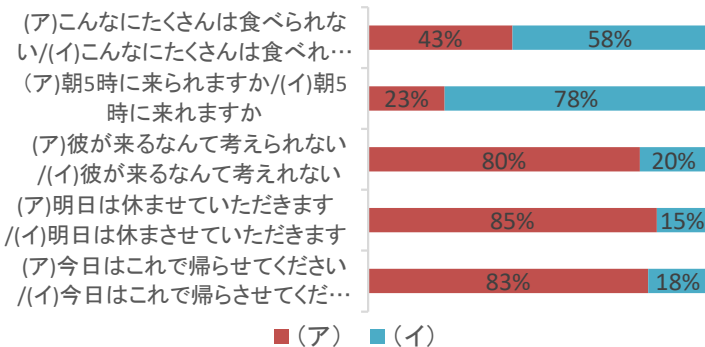
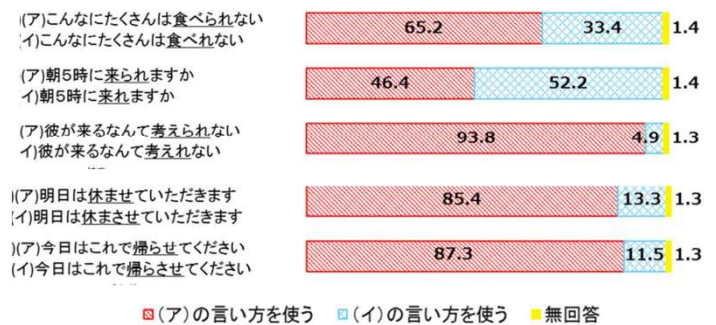


図2: 令和二年度の割合(引用)



4. 考察

今回の調査の結果から特に「食べ(られない/れない)」、「来(られない/れない)」、「考え(られない/れない)」には使い方に大きな変化が見られた。この3つは共通語においては適当ではないとされている「『ら』抜き言葉」を使う割合が大きく増えていた。このことから日本語の使い方には変化が起きていることが分かった。しかし「休ま(せて/させて)」、「帰ら(せて/させて)」に関してはほとんど変化が見られなかったため、「『ら』抜き言葉」のほうが「『さ』入れ言葉」よりも急激に使う割合が増えていることがわかる。これは「『さ』入れ言葉」は敬語で話す時に使われるが「『ら』抜き言葉」は日常の会話で使われることから変化の速度に違いが出たのではないかと思う。日常でつかわれる言葉は急速に変わっているが、敬語など改まった場でつかわれる言葉にはさほど変化は起きていないのではないか。

5. おわりに

日本語の使い方はここ数年で変化しているのか、という問題に対して、アンケートを取ることで言葉の使われ方のデータを集め、今回のデータと先行研究によるデータを比べることで言葉の使い方の変化を調べた。言葉によって差はあるものの一部の言葉の使い方には大きな変化が見られた。

文献:
文化庁国語課(令和二年度) 国民に関する世論調査 p.17-20